

★ 空想の森

7月26日（土）東京（ポレポレ東中野・モーニングショー）

監督 田代陽子  
日本/2008年/129分/（有）森の映画社

田代陽子  
『空想の森』(08)



(C)2008 空想の森上映委員会

大地を耕し、子を育て

ジャーナリスト 松本侑壬子

まずタイトルに惹かれた。「空想の森」とは、本当は北海道の小さな町の映画祭の名前であり、この映画の作者はそこで初めて「ドキュメンタリー映画」というものに出会い、たちまちそのとりこになり、自作への夢を持った、という。1996年のことである。

かといって、2時間を超える長編映画である本作は、この映画祭についての映画というわけではない。監督自身、映画祭にかかわりながら、この町の2組の家族を中心に、しっかりと大地を踏みしめて農に生きる人々の暮らしと想いを、まるでわがことのように描き出す。この家族は、特に夢見がちな人々でもなければ、森に住んでいるわけでもない。けれど、見ているうちに、まるでこちらまで彼/彼女らの仲間になったような、温かな切ない気持ちになってくる。

2時間を超える大作ながら、本作は田代監督の映画デビュー作である。2002年に16mmフィルムで撮り始め、途中から（カメラマンが降りたので）自分でビデオで撮り続け、2006年2月、「撮りたいものはすべて撮った」挙句にクランクアップした。撮った映像は94時間分。その後体調を崩し、しばらく休んでから編集に取りかかり、ようやく2008年3月に完成した。7年がかりの大作である。

内容は、北海道上川郡新得町で農業に生きる若いカップルやシングルたちの真剣で、よく考え迷い、よく働き遊び、生活を楽しむ姿を、対象に密着して描く。撮る対

象は人間ばかりではない。牛を真正面からよだれがかかりそうなくらいに近づいて、超アップで撮る。木立のこずえに浮かぶ温かい色の満月をじっと見つめるように撮る。何のため、というよりは、この美しさを、この感動をぜひ画面にとどめておきたい、という素直な気持ちがにじみ出ている。何かを問いかけたり訴えるというよりも、監督のあふれる愛が伝わる映画。

主人公の一人、山田聡美さんが暮らしているのは、社会に馴染めない人、障害を持つ人を含めさまざまな人々が共に生きる「新得共働学舎」という共同農場だ。ここに来て13年目の聡美さんは、結婚し娘も生まれ、これからの暮らしを考えて家族で独立をしようかどうか思い悩む。自分にとって共働学舎とは、野菜をつくることとは、これまで一緒に苦労し、バンドを組んできた仲間との絆とは…。野菜も、チーズも、空気もおいしい、牛はかわいい。ここには確かな現実の生活がある。

大阪出身の聡美さん、神奈川県出身の夫健一さん。30年前にこの地に入植したベテランでもう一人の主演、宮下喜夫さん夫婦にしてからが、京都と神戸の出身。と、本土出身者が、今では立派な農業や牧畜のスペシャリストとして大地に根を生やしている。ショートヘアに小さなイヤリングがかわいい、まだ学生といっても通じそうな聡美さんも、赤ん坊を背中に農場の野菜の作付けの指揮を執る野菜部長だったりするのだ。

新しい農の在り方に静かな感動を感じる。